森林レンジャーがゆく（137）

「武蔵野のウケラが花の…」

植物には動物の名前が入っている種がよくあります。季節の花としては、ホトトギス、アキノキリンソウ、カメバヒキオコシ、キツネノマゴ、オケラ…名前を聞くだけで、どんな植物なのか興味が湧きませんか。動物との関連があったり、なくても名前の由来を知ったり想像することで植物観察が更に楽しくなります。今回はオケラを紹介します。

オケラは、本州、四国、九州の日当たりの良い山野などに自生するキク科の多年草です。日本最古の和歌集「万葉集」に古名のウケラとして登場しますが、語源や名前の由来は正確には分かっていません。稲藁（いなわら）等の植物を編んで作った雨具の蓑をつけた人の姿が、昆虫のオケラ（正式名はケラ）に似ていること、昔は蓑のことをケラと言ったこと、オケラの葉はしばしば３～５裂し、その特徴的な３裂の葉は蓑の形に似ていることから関連があるなど諸説あるようです。

白から淡い紅色の小さな花が集まって咲く清楚な花より目を引くのは、花を包む魚の骨の様な形をした苞葉（ほうよう）です。種子ができる部分を垣根で囲っているような形状をしていますが、綿毛をつけた種子が実る頃になると種子が風に飛ばされやすい受け皿のような形に開いていました。私には、種子を少しずつ散布するための工夫が凝らされているように思えてなりません。

オケラの花と葉

オケラは薬草や山菜としても有名で、京都の八坂神社では年末に「をけら詣り」が行われています。一年の無病息災を祈願するものだそうです。古来より愛でられ利用されてきたオケラは、自生地となる日当たりの良い山野などが減少したこと、草刈り、薬用目的の採取などが原因で東京２３区では絶滅しています。西多摩では、現時点での絶滅危険度は、小さいけれど生息条件の変化によっては絶滅危惧に移行する可能性のある種となっています。山野で見つけた場合は、そっと見守り、種子が実った頃の美しい姿もぜひ観察してみてください。（加瀬澤）